滯　歐　雜　記　帳（その十一）

工學士　山　本　峰　雄[1]

8. 潢堡造船研究所後援協會大會（3）

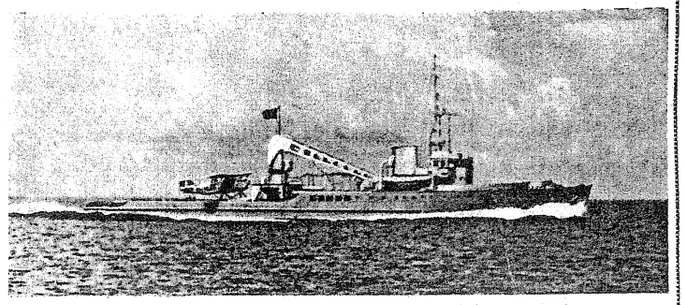
ヒツパーの見學を終つて再び棧橋に戻り，今度は空軍の水上機救難艦グライフに乘る。4400馬力のフオイト・シユナイダー・プロペラを裝備した此の救難艦は其の特性を利用してタグボート無しで横に棧橋を離れて港内に出で更に後進してエムデン號の舷側一尺の所で停止した。飛行機救難艦としてフオイト・シユナイダー・プロペラが如何に有効であるかを參加者に示した。飛行機吊上用のL字型デリツクや飛行機修理作業室，機關室を案内された後に再び棧橋に戻る。

斯くしてキール軍港の半日に亘る見學を終り，再びバスに乘つて今日の宿泊地であるマレンテに向つたのである。マレンテはキールの南方 40 粁のシユレスウイツヒ・ホルスタイン地方の南部の湖水に圍まれた避暑地であつて，ホルスタイン瑞西と云はれる風光明媚な土地である。各國の參加者はマレンテの貸別莊に分宿することとなり我々2人は閑雅なクーン家の厄介になる事となつた。白塗りの垣根に圍まれフリーダの花と菖蒲に飾られた庭を持つた3階建ての家である。貸別莊らしく總てが優雅に飾られ，書架にはゲーテやシラーの古い全集が並んで居る。ヴエランダは獨逸好みの裝飾品で飾られて居る。裏庭は林檎畑で青い小さな果が夕暗の中に光つて居る。主婦のドロテア夫人は 35 歳位の教養のあり相な物靜かな婦人である。主婦の母親が歸つて3人でヴエランダに出て話をする。初對面とも思はれない程氣の置けない接待振りでよい所に落着いたと云ふ感じであつた。先輩の宿はどうであらうかと人の事乍ら氣になつて訪ねて見ると此處は少し格が落ちる樣で部屋も狹く家具等も雜なものである。果して餘り氣に入らないと云ふ話に同情して一同散歩に出かける。ケラー湖畔に出てヨツトを眺め，豪華な別莊の間の大通りを拔けてリンデンの花が咲く並木路を散策する。夕暗の中にリンデンの白い花が盛りで花の香りは大氣に滿ちて居る。フエルスト・ビスマーク・ホテルの傍を通り夜のビーク湖畔の細い散歩道にベンチを見つけて腰を下す。靜かな夜である。曇つた空の下に對岸の別莊の灯が淡く灯つて居る。人の動きに遮ぎられる燈火が對岸の我々に身近に感ぜられる樣な闇夜である。小路の傍には葦が生繁つて時々蛙の飛込む音が靜寂を破る。靜かに澱んだ此の陰鬱な湖の面には藻の花がほのかに白く小さな花を開いて居るのではないであらうか。星月夜には繁つた藻の中に深く神秘的に星の影を宿すのではないだらうか。友人も此の樣な夜の湖の魅力には引入れられて居るのであらう。星座の話が始まり，故郷の少年時代を語り出す。夜露を感じて夜の更けたのを思出してベンチを立つて宿に歸る。

翌日は朝の大氣の中を町の外れを散歩する。有名なホルスタイン種の牛が放たれた牧場に野生の朝顔やフリーダーの花が美しく，牛の首に下げた大きな鈴が牧場の空氣をふるはせて響いて來る。

(1)　航空研究所

やがて高さ2丈もある原始林に入つて太古乍らの苔むした散歩路を奥深く踏入る。獨逸には自轉車の散策道路や散歩道路が到る所の森の中や湖水の畔を縫つて居る。自然は少しも荒されないで原始時代の儘によく保存され，然も野生の鳥や獸がよく保護されて居る。そして森の民族獨逸の特質は自然の中の之等の小路の散歩を樂しむ事によく現はれて居る。マレンテの森は伯林附近では見られない原始的な環境を我々にも樂しませて呉れたのである。森の奥はビーク湖の汀で，此處には遊覽船の棧橋がある。暗く綠に覆はれた待合所で，遊覽船を待つ。ビーク湖は曇つた空の下に濁つた水を湛えて波立ち陰鬱な表情を現はして居る。遊覽船でマレンテに戻りクーン家に入ると昨夜行衞不明になつた荷物が戻つて居る。隣家のクローン氏が此の大會の世話役で大いに骨を折つて間違つて他の參加者の所に持つて行つたトランクを捜出したと云ふ事である。早速隣家にお禮に行くと主人は不在で夫人と娘が出て來て隨分心配したらうと云つて慰めて呉れる。ホテルに晝食に行くとクローン氏が來て居て，トランクの御禮を云ふと「君はほんとに心配したのか」と聞くので「大いに心配したのだ」と云ふと「獨逸では決して物はなくならないから心配しないでもよい」と云ふ事であつた。さう云へば二ケ月前ケルンでも失敗を一つやつた。此の時はカツセルからアーヘンに行く旅行の途中友人と食堂車に行つて居る内に我々の車が離されてデユツセルドルフに行つて終ひ，寒空に帽子も外套も無くアーヘンに降りたのであるが，アーヘンの驛のプラットフオームには驛長と赤帽が待つて居て君達の荷物は一時間半の後に此處に着くから食堂でビールでも飲んで待つて居て呉れと云ふ事であつた。

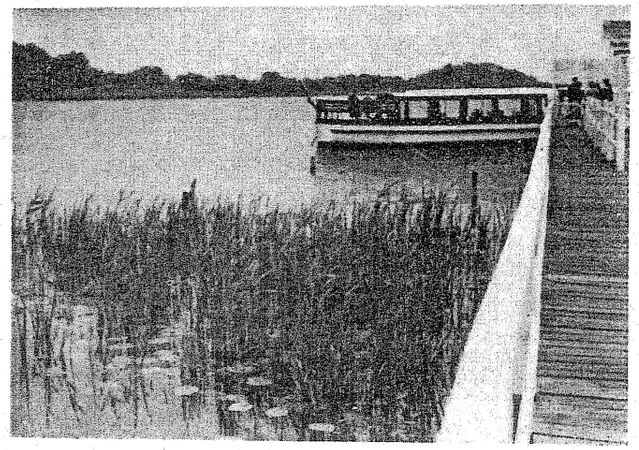


第 1 圖　水上機救難艦グライフ

食堂の給仕女は外套も着ないで入つて來た我々を不思議さうに見て居るのであるが，驛長の云つた通り一時間半の後には我々の荷物を赤帽が食堂に運んで來て呉れたのであつた。外套のポケツトの弗入れの小錢はデユツセルドルフ驛ですつかり拔いて在中高を書いた證明書が入つて居た。翌日驛の遺失物掛りで此の證明書と引換へに現金を拂戻して呉れたのである。獨逸はこんな點は歐洲の他の國に比較して非常に行屆いて居るのである。私の他の友人も手提鞄の中に寫眞機を入れた儘車中に忘れたが之も一物もなくならずに手に入れる事が出來た。

午後こんな因緣で仲よくなつたクローン氏一家の見送りを受けて思出のマレンテを後に伯林に向

第 2 圖　マレンテの風光



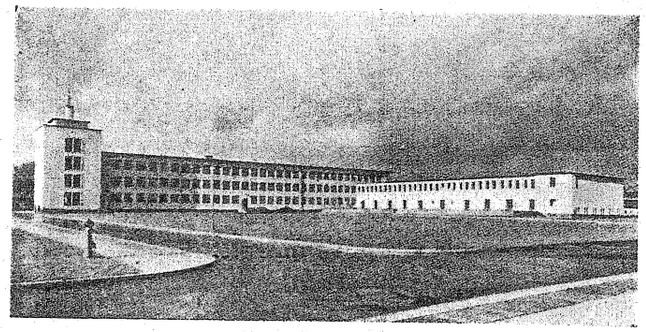
第3圖　ビーク湖畔

知の事實である。大戰後もあの疲弊時代の苦境の中に在つて小規模乍ら徐々に擴張を續けたのである。而してナチスの航空擴張と共に研究機關の未曾有の大擴張が行はれて DVL も亦再編成され大擴張されたのである。今や DVL は其の面目を一新し所長フリードリッヒ・ゼーワルトの下に飛行機部，發動機部，艤裝部，總務部を置き，飛行機部には空氣力學研究所，水上機研究所(漢堡)，飛行力學研究所，構造研究所，材料研究所の5研究所を，發動機部の中には動力裝置形態研究所，發動機作動及熱力學研究所，發動機力學研究所，燃料滑油研究所の4研究所と更に艤裝部の中には電氣物理研究所，機上計器及航法研究所，航空寫眞研究室，航空醫學研究室を置き，總人員 2000 人を算するに至つて居る。此の中 600 人は Diplom Ingeniem の稱號を持ち 200 人は Dr. Ing. の學位を持つて居る。然も 700 人の職工を擁する工場を持つて研究の能率を上げて居る。敷地は從來の北方敷地の外に南方敷地とヨハニスタール飛行場に沿ふ西方敷地に迄伸びて居るのである。

つた。クーン家でも暇があつたらシーズンの中に是非もう一度來て呉れと云つて我々を喜ばせた。

翌 19 日は「リリエンタール航空研究協會の日」である。早朝DVL に集合する。案内係りのH君は此の前の見學の時から顔見知りである。DVL の大講堂トムゼンザールに集合した後數班に別れて DVL の大風洞，變壓垂直風洞，單氣筩發動機試驗室，發動機運轉試驗室，材料研究室，構造研究室，プロペラ試驗裝置等を順次に見學する。1912 年に設立された DVL は前大戰勃發當時は僅かに70人の人員を擁して居るに過ぎなかつたが，軍部の航空技術部が設けられて大戰中は軍部と共同して軍用機に關する研究と審査が大規模に行はれて軍用機の性能向上に，幾多の貢獻を行つたのは周

所長の下には工科大學卒業者を更に三ヶ年間教育した獨逸航空界のリーダーである Flugbaumeister を養成するために技師養成部が設けられて居る。



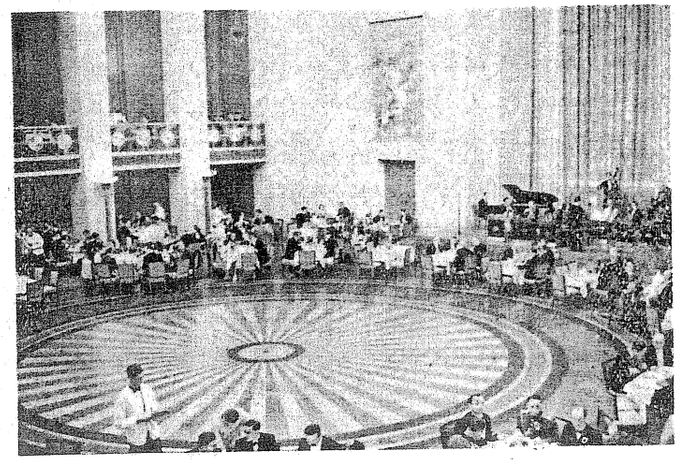
第4圖　DVL 本館の講堂

獨逸の各研究所の報告及航空省の飛行機及發動機關係の規程等を發行する中央航空報告部も此處に設けられ文字通り獨逸に於ける航空研究の中心である。

空襲避難所を始め各種の福利施設も完備して居る事は云ふ迄も無い[2]。

午前中で見學を終り晝食の爲にテムペルホーフの飛行場に向ふ。此處では前に書いた新しいテムペルホーフ飛行場の建設計畫に就いてザーゲビール博士及飛行場長ベツトガー氏案内の下に見學がある。

夜は伯林の「飛行士の家」(Haus der Flieger) でリリエンタール協會主催の晩餐會が催された。「飛行士の家」は航空省及びテムペルホーフ新飛行場の建築家であるザーゲビール氏が 1937 年に舊プロシヤ地方議會を改造して作つた祝祭用大ホールで獨逸飛行クラブに屬し獨逸航空關係の主なる會合は全て此處で行はれて居る。



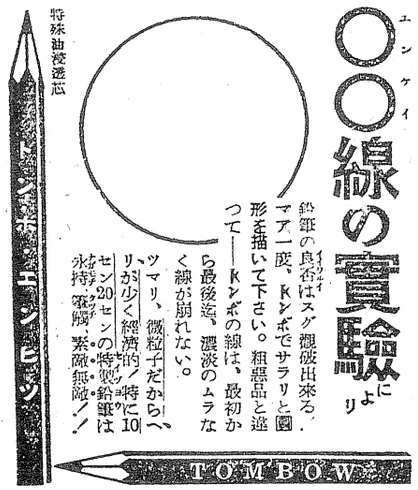
第5圖　「飛行士の家」の大ホール

大ホールの外に多數の小集合室があつて，各部屋は何れも航空に關する油繪や彫刻で飾られて居る。晩餐が始まる前に獨逸空軍の首腦者が參會者を案内して各室を巡つた。其の簡素で落付いた裝飾は新獨逸ネオ・ルネサンスの藝術を誇つて居る。各室を見終つた後に豪華な圓形大ホールのテーブルが開かれて會食が始まる。今日はダンスがないので中央迄食卓を出して居る。航空省代表者の挨拶の後外國代表者の謝辭があつて後は和かな會食が續いた。

翌 20 日は「造船技術協會の日」であつて伯林工科大學の講堂で，「船舶の繼目の引張强度」に關する講演があつた後，工科大學に附屬する「治水，土木，及造船に關するプロシヤ研究所」の見學を行つた。實驗室全體を使用する大掛りな土木治水關係の研究，中でも余水板の水力に依るフラツター類似現象の實驗は興味深いものであつた。

此處にもフロートの水抵抗を試驗する高速キャリツヂを持つた水槽がある。

午後はジーメンス都市及會社の見學があつたが何れも一度見たものであつたので遠慮した。夜は有名なマーモアザールで造船技術協會及後援會聯合の最後の夜會が行はれた。婦人の參會者も特に多く，中には日本の羽織地を夜會服のマントに仕立てたものを着込んで人目をひいた婦人も居た。會食前の一時を獨逸の人々と話す。A氏は日本の參加申込が遲れた爲に，日本の大國旗を捜すのに一骨折つた苦心談を始める。成程さう云はれると



2) 獨逸航空研究所に就いては科學第 10 卷第 10 號の拙稿を參照されたい。

第1日目に日章旗が見えなかつたのは，却つてこちらの手落であつたとA氏に感謝の意を傳へて置く。

デザートコースでは各國の代表は交々立つて主催國に感謝の挨拶を述べたのであつたが，第一に立つたのは石油の國ルーマニヤの代表で，流暢なフランス語で先づ感謝の辭を述べ最後にキール軍港に於けるレーダー提督の言を引用して，獨逸の造艦に於ける努力を讃へた。續いてバルカンの主なる國の代表の挨拶があつた後フランス代表は學者らしい挨拶を行つたのであるが，英國の代表は稍々皮肉な語調で重苦しい演說を行つた。最後はダンチヒの若い青年が立つて，先づ「ハイル，ヒツトラー」を唱へてから「祖國獨逸の海軍が異常なる努力を以て世界平和のために，其の艦隊を建設しつゝある事は我々の最も大きな喜びである」と述べて挨拶を終つたのである。會食後フランス代表と我々とは偶然一隅に落合つて話す機會が出來た。

彼等は先日から獨逸の食事に參つて居たが，キール以來精神的壓迫を受けて居た際今日の代表の挨拶ですつかり氣を腐らしたらしく，早くフランスに歸りたいと漏らして居る。

斯くして8日間に亘る國際的會合は終り，參加者は獨逸造船航空關係者と互ひに挨拶をして別れたのである。參加國の中の或者は，再び海上に於いて相見えるべく，或者は再び戰友として立つべく。

マーモアザールを出て，タウエンチン街に出れば此處は歐洲の雲行きも知らぬ氣に，電飾はまばゆく人々は短い獨逸の夏の夜を，カフエーや，ビヤホールのテラスに，溢れ樂しんで居るのであつた。

× × ×

航空局航空官 工學士 南波辰夫著

飛行機性能修正法

附 修正換算實例

——定價35錢 送料3錢——

航空局航空官 工學士 南波辰夫著

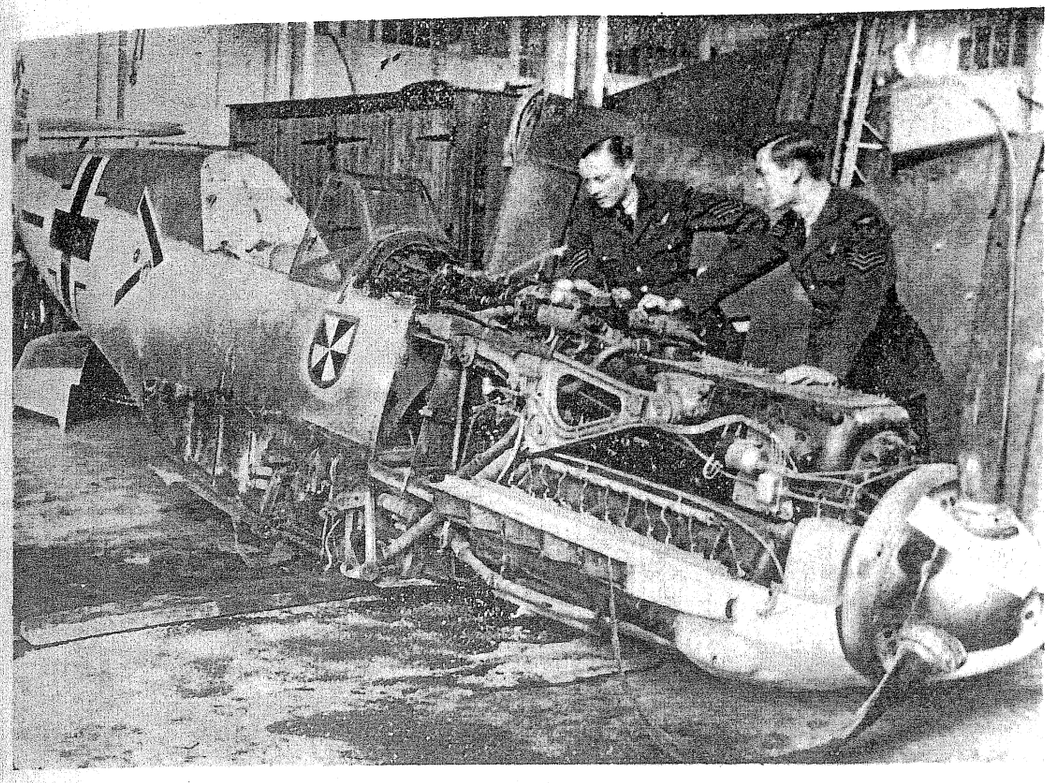
航空機修理要領

(附)

航空局航空官 工學士 村田元之助著

發動機性能圖表に就て

——定價30錢 送料3錢——



メッサーシュミツト Me 109 型單座戰鬪機（獨逸） 言ふまでもなく，英軍に撃墜されたもので，獨逸軍用機獨特の簡單巧妙な發動機搭載法，主翼の取付金具の構造等よく分つて興味深い．（井出昌吉）